

山田研一 ただ今 単身赴任中

橘 左京 作

山田研一は現在、東京に単身赴任中である。金帰月来で毎週、東京と新潟県長岡市の間を新幹線で往復している。山田の勤務している会社は長岡市に本社がある食品製造会社だ。新潟県は日本有数の米どころで米菓や餅など米の加工食品の製造会社が多い。なかには全国ブランドになっている商品もある。今年四月の人事異動で山田は東京営業所長として赴任することになった。

金曜日の夕刻。一週間の仕事を終えた山田は東京駅の新幹線ホームから上越新幹線に乗って、自宅で山田の帰りを待っている妻の由紀子と娘の弥生のもとへと向かう。山田が乗り込む車両はいつも自由席車両だ。しかも八号目の車両に決めている。なぜ八号車かという理由は単純。山田の誕生日が八月だからだ。この時間帯に東京駅を出発する新幹線の車内は、男性サラリーマンにほぼ占拠されている。乗客の多くは、会社帰りに一杯やっけて帰宅する新幹線通勤の男性や山田と同じ単身赴任中と思われる男性などだ。

ホームで発車のベルが鳴り響くなか、二階建て車両の八号車に乗り込んだ山田は階段を降りて比較的、空席の多い一階席に向かった。座席シートを回転させて向かい合わせの四席にして賑やかに歓談しているグループが目に入った。会社の飲み会が終わって帰宅する同僚の人たちだろうか。缶ビールを片手に仕事の話で盛り上がっているようだ。

山田は飲み会帰りの一団から少し離れた空席を見つけて座った。早速、駅の売店で買った五百ミリットル入りの缶ビールを買い物袋から取り出した。

プッシュ

山田は缶ビールの栓を抜いて冷えたビールを喉に流し込んだ。次に袋に入っている乾き物を取り出した。乾き物の「柿のタネ」は山田が勤務する会社の主力商品の一つだ。小袋には柿の種に似せた米菓とピーナッツが入っている。缶ビールと「柿のタネ」。山田に暫し至福の時を与えてくれる名脇役だ。山田は東京で過ごした一週間を振り返り、家で山田の帰りを待つ由紀子や弥生に思いをはせた。

長岡駅で新幹線を降りた山田はローカル線に乗り換えて一駅先の駅で降りて我が家に向かった。山田の家は駅から歩いて十分程の所にある。大通りを左折すると数軒先に我が家の明かりが見えてきた。

「ただいま」

研一は玄関のドアを開けて、由紀子と弥生に帰宅を知らせた。

「お帰りなさい」

台所で食事の支度をしている由紀子の声が聞こえる。

「お帰りなさい。お父さん、東京でちゃんとご飯を食べていたの」

弥生が玄関に出てきて研一を出迎えた。

「もちろんだよ、弥生。まだ起きているのか。もう九時だぞ。部屋に戻って寝なさい」

「お父さんに話したいことがあるの」

「今日は遅いから、明日の朝に話を聞くとよ」

「はい、分かったわ。お父さん、お休みなさい」

「お休み」

研一は台所で遅い夕食をとりながら由紀子との数日振りの会話を楽しんだ。

「女の子は母親に似ると言われているけれど、弥生の言葉遣いも君に似てきたみたいだね」

「さつき玄関で、弥生があなたに言った、ちゃんとご飯を食べたかという話ね」

「そう。君が月曜日に渡してくれた献立表に従って、ちゃんと自炊していますので心配なく」

「分かっているわよ。でも平日はあなたを見ていないので心配なのよね。時々、弥生とご飯を食べながら、あなたの話しをすることがあるのよ。会社の帰りに、毎晩、晩酌を兼ねて外食しているんじゃないかって」

「それで僕が家に帰って来るなり、弥生がああいう質問をしたんだね」

研一は話を続けた。

「ところで、弥生がさつき、私に話したいことがあるって、言ってたけど、何か分かる？」

「きつと、夏休みに入ったら東京デイズニerlandに連れて行ってもらいたいという話だわ。お友達的美咲ちゃんや小百合ちゃんが五月の連休に家族旅行で東京に出掛けたそうなの。東京スカイツリーやデイズニerlandに行ったことを学校で自慢しているそうよ」

「そうか。まだ弥生を東京に連れていったことがなかったね。お盆前の八月上旬なら会社もそんなに忙しい時期ではないし、金曜日に一日休みをもらって三連休にしよう。僕が今、

住んでいる都内の社宅は二DKの間取りだし、君や弥生が東京に来て泊まることもできるよ」

「その話、明日、弥生が聞いたら、きっと喜ぶわよ」

「そうだね」

翌朝、朝食のテーブルを囲んで弥生は、研一の顔色を伺うようなそぶりと言った。

「昨日、お父さんが家に帰って来た時に話したいことがあるって言ってたでしょう。それはね。五月の連休にお友達的美咲ちゃんや小百合ちゃんがデイズニーランドと東京スカイツリーに行ったことを学校で自慢しているの。弥生もデイズニーランドやスカイツリーに行きたいんだけど」

「その話、昨日の夜、お母さんから聞いたよ。夏休みに入った八月に三人でデイズニーランドとスカイツリーに行こうか」研一は弥生に答えた。

「ほんと、うれしいな」弥生の口元がほころんだ。

「弥生、お母さんと二泊三日の日程で東京に来なさい。東京駅のホームでお父さんが待っているよ。他にも行きたいところがあれば、お母さんと相談して決めておくんだよ」

「わーい。早く夏休みが来ないかな」弥生は、突然、箸を持った手を上げた。

「弥生、お行儀が悪いわよ。ちゃんとしてご飯を食べなさい」由紀子が弥生を注意した。

「はい」弥生は姿勢を正してご飯を食べ始めた。

家族と週末を過ごした研一は、月曜日の朝早く新幹線に乗って東京に向かった。今日から金曜日までの五日間は東京での一人暮らしがまた始まる。八号車の座席に座った研一は、由紀子が作ってくれた朝食のおにぎりを食べながら、彼女から手渡されたメモに目をやった。メモには五日分の献立表と必要な食材や調理方法が詳しく書いてある。

メモを見ながら、研一は長かった独身の頃を思い出した。由紀子と結婚するまでは、研一の食生活は外食中心の不健康な食習慣が続いていた。朝は自宅アパートでトーストと目玉焼きの簡単な食事で済ませ、昼と夜は外食。残業で帰宅が遅くなる日は、自宅近くの居酒屋で一杯やって帰ることが多かった。

一人暮らしの研一には、自宅で帰りを待つ人がいない、自宅で研一の体調を気遣う人がいない。自由気ままな一人暮らしが研一の不健全な食生活を助長させていた。食習慣の乱れが会社で受けた健康診断に現れた。生活習慣病の診断項目の一つになっている血糖値に異常値が出たのだ。社員の健康管理を担当する職員課から「要再検査」の通知を受けた研

一は会社近くの病院で再検査を受けた。案の定、再検査の結果、担当した医師から糖尿病の診断を下された。以来、研一は、定期的にこの病院に通院し糖尿病の治療を受けることになった。この病院では治療と併せて栄養指導も行われていた。研一の栄養指導を担当した管理栄養士が妻の由紀子だった。研一はこの病院に定期的に通院して、毎回、ヘモグロビンA1cを調べる血液検査と由紀子から栄養指導を受けることになった。これが縁となり研一は由紀子と結婚した。

研一は現在も糖尿病の治療を続けている。二月に一回の割合で、自宅に帰った週末土曜日に自宅近くのクリニックに通院している。このクリニックで体重測定、尿検査、血圧検査、血液検査を受けて二か月分の薬を処方してもらっている。家ではご飯の量を減らすなど、由紀子から糖質制限の食事を作ってもらって体重管理を行っている。由紀子のおかげで六十八キロあった研一の体重が今では五十八キロになって十キロの減量に成功した。また肥満度を示すBMI値も17.8と、標準の範囲内にある。通院先のクリニックで受けている血液検査でも、ヘモグロビンA1cが正常値の9.2パーセント未満を維持している。担当医師からも良好な状態を維持していると褒められ、研一は由紀子に感謝の気持ちでいっぱいになった。

五日間の献立表には朝昼晩の献立と調理に必要な食材リスト、食材のグラム数、一食当たりの消費カロリー、最後に一口アドバイスが書いてある。献立表に載っている料理はどれも手間をかけずに簡単に調理できるものばかりだ。なかには作り置きのできるものもある。野菜や肉、魚などの生鮮食品を買う場合、一食分以上の量になってしまうが、数食分の料理をまとめて作っておいて冷蔵庫にストックしておけば、買った食材は無駄にならないし、ストックした料理は保存期間内であればいつでも食べられる。意外と重宝するのが缶詰と冷凍食品だ。缶詰は味付けしていない水煮にしたものを、冷凍食品の場合には、調理していないチップ状の生野菜を買い置きしておく。

味付けされた缶詰や調理済みの冷凍食品はご法度だ。これらの加工食品には、塩などの調味料が多めに使用されているからだ。もちろん惣菜の類も一般的に味付けが濃くなっているため厳禁だ。五日間の献立表に並んでいる料理を調理するのはもちろん研一であるが、手書きの献立表の文字には、研一の健康を気遣う由紀子の気持ちが入められている。

(自分一人の体じゃない。週末になれば由紀子や弥生に会える)

研一は、そう自分に言い聞かせて東京での一人暮らしの不便さを克服しようとしている。

研一が普段、買い物に利用しているお店は社宅近くにあるスーパーだ。このスーパーの菓子コーナーに研一の会社が製造、販売している「柿のタネ」をはじめ数種類の自社商品が陳列棚に置かれている。お米のコーナーには新潟県産のコシヒカリも並んでいる。店内にある惣菜コーナーにはいろいろなお惣菜がパック詰めでワゴンに並べられている。

調理せずにそのまま食べられる気楽さだろうか、お惣菜コーナーには大勢の買い物客が集まっている。高齢化が進んで夫婦二人暮らしや一人暮らしのお年寄りが増えたのだろうか、お惣菜コーナーには高齢な女性の姿もみられる。研一のように一人暮らしの単身者向けなのだろうか、少量パックの惣菜が多いのに気づいた。研一は、この惣菜であれば食べ切りサイズと思い、大好きなハンバーグに手を伸ばそうとするが、由紀子の顔が思い浮かんで、直ぐに手を引っ込めてしまった。

研一は、時間に余裕があるときは、駅から降りて社宅に帰る途中にある商店街で買い物をすることがある。商店街にあるお店にはスーパーにはない魅力がある。店主や店員と交わす会話が楽しい。特に野菜や肉、魚など生鮮食品を扱う店の主人がプロの目利きを披露してくれる。

「お客さん。魚はね。目の澄んでいるもの、えらが鮮紅色のもの、全体がピンと張っていて、うろこがしっかり付いているものがいいよ。目が白かったり、充血しているものはやめておいた方がいいよ。どうだい。今朝入った千葉県沖でとれたアジだ。刺身にできるほど新鮮だよ」

「お客さん。牛肉は肉色が鮮やかな濃紅色で表面につやのあるもの、脂肪はクリームがかった白色で赤身との境がはっきりとしているもの。豚肉は肉色が淡いピンク色で、表面につやのあるもの、脂肪が真っ白で固いもの。鶏肉の方は胸の肉色は淡いピンク色、ももの方は濃いピンク色のもの、表面に張りつつやがあるものもいいよ。パック入りの肉類は肉汁が出ていないものを選ぶこと。うちのはどれもおすすめ品だ」

「お客さん。大根、人参、ジャガイモ、かぼちゃは程よい大きさでしっかりした重さのあるもの、色が鮮やかで均一のもの。特にかぼちゃは実がしっかりと詰まっているものがいよ。どうだいこのかぼちゃ、今朝入ったばかりの品だ。煮物にいいよ。わかめとひき肉を入れたそぼろ煮にすると美味しいよ」

こんな具合に店の主人が鮮度の高い食品の選び方やその食材を使った調理方法まで教えてくれる。研一は店主から伝授された「目利き」をスーパーで生鮮食品を買う時に活用している。商店で買い物をするもう一つの利点は必要な食品を必要な量だけ買うことができる

ることだ。いわゆる量り売りである。確かに百グラムあたりの単価で比べるとスーパーで買う方が安くなるが、生鮮食料品のように鮮度が要求されるものを余分に買っても、結局、腐らせてしまう。

研一がある八百屋の主人から聞いた話であるが、スーパーでは売れ残りの生鮮食品を揚げ物などの加工食品にして売りに出されることが多いそうだ。研一は、普段、買い物で利用しているスーパーのお惣菜コーナーに並ぶ加工食品もそうなのだろうかと思った。鮮度の落ちた生鮮食料品を揚げ物などに加工すれば新たな食品に生まれ変わり、スーパーの売上げに貢献する。これもスーパー業界がコスト競争の中で生き抜くための知恵の一つではないかと感心する。しかし、価格よりも品質を優先する消費者もいる。そのような消費者は新鮮な食材を使った加工食品の方を選ぶのではないかと研一は思った。

研一の会社で製造する米菓に使う米は、そのほとんどが地元新潟県産の米だ。農薬や化学肥料はできるだけ減らして堆肥などの有機肥料を使った米作りをしている農家と契約して作ってもらった米を仕入れている。自社の米菓は他社のものと比べ少し割高な価格設定ではあるが、価格よりも品質を求める消費者のニーズには応えているとの自負がある。

夕食の食材が入った買物袋を持って社宅へ帰る道すがら赤提灯が見えた。会社帰りに時々立ち寄る居酒屋だ。今日は平日だが、研一は休日勤務の振替休日に充てていた。一日限りの休日だったこともあり、研一は帰省せずに社宅で休日を過ごしていた。

(ちよつと立ち寄ってみようかな。)

居酒屋の暖簾をくぐって中に入ると数人のスーツ姿の男性客がいた。この店は椅子席のない立ち飲みの居酒屋だ。電車の待ち時間に軽く飲んで家路に付くサラリーマンには都合のよい店なのかもしれない。

研一は顔なじみになった店の主人に「いつものお願いします。」と言って、注文を入れた。しばらくして、「はい、どうぞ。」と店主から差し出されたのは一合瓶の日本酒と焼き鳥三本のセットだった。

私服姿の研一に気づいた店主が、「山田さん。今日は会社、お休みですか」と尋ねた。

「ええ、振替休日で休みになりました」

「新潟には帰らなかったんですか」

「はい。一日限りの休みですから、こっちで過ごすことにしました」山田は店主に答えた。

居酒屋で軽く飲んだ後、研一は社宅へと向かった。社宅に帰った研一は夕食の支度を始

めた。今晚は軽めの食事でもいいな。由紀子からは、会社の飲み会などの宴席があった場合の細かい注意点を書いたメモが渡されている。

このメモにはお酒を飲むときの心構えが五項目に渡って書いてある。

一、飲む前の心得

○チーズを食べる

○牛乳を飲む

二、飲んでいる間の心得

○野菜類などの植物性食品を多くとる

○塩分控えめで食物繊維を多く含んだ食べ物をとる

○たんぱく質の豊富な食べ物が好ましい

【おススメのおつまみの例】

焼き鳥、枝豆、サラダ、刺身、卵焼き、豆腐、チーズ、アサリの酒蒸し、

しらすおろし

三、飲んだ後の心得

○果物を食べる

○柑橘系の果汁が入った飲み物を飲む（例：グレープフルーツジュース）

四、お酒の「適量」

「節度ある適度な飲酒」を心がけ、週に二日は休肝日とすること

○ビール…中瓶一本

○日本酒…一合

○焼酎… $\frac{6}{10}$ 、六一合

○ウイスキー…ダブル一杯

○ワイン…四分の一本

○缶チューハイ…一・五缶

五、御法度

○はしご酒

○仕上げのラーメン

研一はこのメモを「五箇条の御誓文」と呼んで手帳に綴じて、時々、確認している。しかし四項目のお酒の「適量」については、家で飲む晩酌では厳守しているが、外での飲み

会ではなかなか難しい。その代わりに、飲み会があった日の翌日と翌々日の二日間は休肝日になっている。

八月上旬の金曜日。今日は由紀子と弥生が東京に遊びに来る日だ。研一は金曜日に有給休暇を取って土日を入れた三連休にした。由紀子と弥生を乗せた新幹線が午前十一時半に上野駅に到着した。研一は新幹線のホームで由紀子と弥生が乗っている車両のドア付近で二人の到着を待っていた。ドアが開いて大勢の親子連れがホームに降りた。由紀子と弥生を見つけた研一が、手を振りながら弥生に声を掛けた。

「弥生、こっちだよ」

「あ、お父さんだ」

由紀子と弥生が研一のいる場所にやってきた。

「お疲れさま。今日の新幹線は混んでいなかった」研一は由紀子に尋ねた。

「指定席を取っておいてよかったわ。自由席に入りきれない乗客が指定席の通路にまで入ってきたの」由紀子が答えた。

「親子連れの乗客がたくさんホームに降りたようだけど、夏休みに入った子供たちが親と一緒に東京に遊びに来たみたいだね」研一は話を続けた。

「そうなのよ。私たちが乗った八号車の乗客のほとんどは親子連れだったわ」

由紀子が答えた。

「お父さん。私、お腹がペコペコよ。お昼はどこで食べるの」弥生が研一に尋ねた。駅の構内にある大きな掛け時計が間もなく正午を告げようとしていた。

「上野公園にハヤシライスの美味しい店があるから、そこに行ってみようか」

研一が答えた。

「お家で食べるハヤシライスも美味しいけれど、そのレストランのハヤシライスも食べてみたいわ」弥生が言った。

ハヤシライスは弥生の好きなメニューの一つだ。家でも弥生のリクエストを受けて、由紀子が時々、作ってくれる。上野駅の中央出口を出た三人は上野公園にあるレストランに向かった。このレストランの看板メニューがハヤシライスだ。研一が都内の大学に在学していた頃に、何度かこのレストランでハヤシライスを食べたことがあった。学生時代に食べたハヤシライスの味をもう一度楽しみたい、そんな思いでこのレストランを選んだ。

三人がレストランに着くと入口には長い列ができていた。係りの人に待ち時間を聞くと、

一時間近くになるとの返事だった。この後の日程を考えて、研一はハヤシライスを断念した。研一が考えていた今日の日程は、上野動物園、浅草、東京スカイツリーの順で都内を見て回るようになっていた。

夏休みに入ったこともあって、上野動物園は大勢の親子連れで賑わっていた。研一たちは園内にあるファストフード店でお昼をとることにした。お昼時ということもあってテーブルはどこも満席だった。やっと見つけた三人掛けのテーブルを研一が確保して、由紀子と弥生はお昼を買いに行った。しばらくして、二人はお昼と飲物を載せたトレーを持って、研一が待っているテーブルに戻った。弥生はハンバーガーとオレンジジュース、由紀子はサンドイッチと野菜ジュース、お任せで頼んだ研一のお昼は焼きそばと野菜ジュースだった。隣の親子連れのテーブル席では父親らしき男性が焼きそばを食べながら紙コップに入った生ビールをおいしそうに飲んでいた。今日のような暑い日は、生ビールの味も格別だろうと思いつつ、研一はミスマッチな組み合わせの焼きそばと野菜ジュースを口に入れた。

ジャイアントパンダ、スマトラトラ、インドライオン、アジアゾウなど、上野動物園の人気動物を一通り見て回ることにした。研一が初めて上野動物園を訪れたのは、中学三年生の修学旅行の時だった。日中国交正常化を記念して一九七二年に中国から上野動物園にジャイアントパンダの「カンカン」と「ランラン」が贈られ、当時は全国的なパンダブームに沸いていた。研一が上野動物園で初めて見た「カンカン」と「ランラン」は、厳重な警備態勢のもと、ガラス越しで見たパンダの姿であった。今でもパンダはこの動物園では一番の人気者らしく、パンダ舎の前には黒山の人だかりができていた。研一たちの立っている場所からはパンダの姿は見えない。

「お父さん、ここからじゃ、見えないよ」

「分かったよ」

研一は弥生を肩車に乗せた。これなら弥生もパンダの姿を見ることが出来る。

「お父さん、パンダが今、笹の葉を食べているよ」

実物のパンダを初めて見た弥生は大喜びだ。三人は人気動物を中心に園内を一通り見て回った。テレビでサバンナに生息する野生動物を見ることがあるが、食物連鎖、弱肉強食の世界で生きている野生動物には緊張感や張り詰めたような雰囲気がある。しかし動物園で飼育されている動物はどこかのんびりしている。もっとも、ジャイアントパンダは野生

の中でも天敵がないせいかな、のんびりとした動きをしているようだが……。動物園で飼育されている動物に緊張感が見られないのは、家畜と同じように食べ物の心配がいらなからだと、研一は思った。食物連鎖の頂点にいるはずのライオンやトラを見ても猛獣としてのイメージとは程遠い。人気動物を中心に園内を一通り見て回った三人は、上野動物園を出て、次の目的地に行くため上野駅に戻った。

浅草へは地下鉄を使って行くことにした。上野駅から三つ目の浅草駅で下車すればいい。初めて地下鉄に乗車する弥生は興味津々だ。研一たちが銀座線のホームで浅草行きの電車を待っていると、三人の前を反対方向の電車が通り過ぎた。

「お父さん。どうして、地面の下に電車が走っているの」弥生が研一に尋ねた。

「地下にトンネルを掘って、線路を敷いて電車を走らせているんだよ」研一は答えた。

この時、研一は「地下鉄の電車はどこから入れたの？それを考えていると一晩中眠らないの」という地下鉄漫才コンビのギャグが頭に浮かんだ。

「お父さん。どうして、にやにやしているの」

「ううん、何でもないう」

間もなくして、浅草行きの電車がホームに滑り込んだ。三人は車両に乗り込んで空いた席を見つけて座った。平日ということもあって車内は鞆を持った会社員の姿が多く見られた。天井から吊り下げられたポスターが並んでいる。中吊り広告だ。東京勤務になってからは地下鉄を使って取引先に行くことが多い研一にとっては見慣れた車内の光景であったが、弥生は興味深そうに中吊り広告を眺めていた。

「お父さん。天井からポスターがぶら下げられているけれど、あれって何なの」

弥生が研一に尋ねた。

「中吊り広告と言って、ポスターに雑誌の見出しを書いて吊るしているんだよ」

研一は弥生に答えた。

定期購読の新聞と違って店頭販売が中心の雑誌の場合、広告に力を入れている。読者の関心を引き付けるような見出しで書かれた広告を電車の中吊り広告や新聞広告に掲載している。研一は通勤に使っている地下鉄の中吊り広告に目が留まり、駅の売店で経済誌を買って読んだことがあった。研一の興味を引いたのが「米菓業界の海外戦略あれこれ」という見出しだった。人口減少に伴い国内市場が先細りしていくなかで、米菓業界でも海外市場に進出する同業他社が出てきた。新潟県内に本社がある全国最大手が既に北米市場に進

出している。業界中堅の研一の会社でも、つい最近、海外市場の開拓に向けて、検討を始めたところだ。

研一たちを乗せた電車は、稲荷町、田原町を通過して終着駅の浅草駅に到着した。地下のホームから階段を上って地上に出ると目の前に浅草のランドマークになっている雷門が見えた。

「お父さん、見て。大きな提灯がぶら下がっているよ」

「雷門の提灯だよ」研一が答えた。

雷門は浅草寺の山門で、中央には大きな提灯が吊り下げられている。雷門の正式名称は「風神雷神」で、門に向かって右側に風神、左側に雷神が配置されている。雷門をバックに外国人観光客のグループが写真を撮っている。外国人観光客を乗せた人力車が雷門の前で止まった。入れ替わるようにして、別の外国人ペアが人力車に乗り込んだ。どうやら雷門前が人力車の発着所になっているらしい。

「お父さん、あれ人力車じゃないの。テレビの時代劇で見たことがあるよ」

初めて本物の人力車を見た弥生が驚いた様子で研一に尋ねた。

「車がなかった昔は、人力車に人を載せて運んだんだよ」

大通りを迅速に行き交う自動車の流れと通りの端でゆっくりと走る人力車のミスマッチな光景が何となく面白い。

雷門をくぐって宝蔵門までの参道は仲見世通りと呼ばれ、参道の両脇には土産物、菓子などを売る露店が軒を並べている。雷おこしや人形焼きなどの和菓子やミニ提灯、鈴付きお守り、風鈴、箸、手ぬぐいなど多種多様な和風小物が店頭陳列されている。和服姿の外国人観光客の団体が物珍しそうに和風小物を手に取って眺めている。クールジャパンに魅せられて訪日する外国人観光客が増えているようだ。研一は、平成二十七年の訪日外国人観光客が二千万人近くになったという、観光庁の発表した数字を思い出した。

人形焼きのお店では試食ができるらしく、店先で数人が試食しながら品定めをしている。研一も人形焼きを食べたくなったが、由紀子の視線が気になった。

「お母さん、私も人形焼きが食べたい」と、弥生が言った。

「美味しそうね」と言っ、由紀子は弥生と試食品を手にとって食べ始めた。

「美味しいわ。あなたもどうぞ」

研一は、由紀子から差し出された一口大の人形焼きを口に入れた。

「本当だ。美味しいね」

「お母さん、お土産に買っていこうよ」弥生が由紀子に提案した。

「そうね。お参りした後、買って帰りましょう」由紀子が答えた。

宝蔵門をくぐると目の前に本堂が見えた。本堂の前にある大きな香炉の周りに人だかりができています。参拝者は香炉からモクモクと舞い上がる煙を自分の体に掻き集めようと手を動かしている。研一たちも香炉に近寄った。

「お父さん、どうして線香の煙を体にかけるの」弥生が研一に尋ねた。

「体の悪い所に、煙をかけると直りが良くなるという言い伝えがあるからだよ」

研一が答えた。

「私の体は、別に悪い所はないけれど、もっと学校の勉強ができるようになりたいわ」弥生が言った。

「弥生、煙を頭にかけると学校の成績も上がるわよ」由紀子が答えた。

研一たちは香炉の煙を手で掻き集め、体中に振りかけた。本堂でお参りをした後、浅草駅から東部スカイツリーラインで一駅先にある次の目的地に向かった。

東京スカイツリーは東京都墨田区に建設された電波塔だ。二〇一二年五月に開業し、観光商業施設やオフィスビルが併設され、ツリーを含め周辺施設は「東京スカイツリータウン」と呼ばれている。

東京スカイツリーが営業を開始して四年余りが経ったが、平日にもかかわらずチケット売り場の前には長蛇の列ができていた。研一たちは、会場整理をしている係りの人にインターネットで購入した日時指定券を提示したら別の窓口以案内された。長い行列は当日券を買い求める人たちだった。そのうえ強風のため窓口が午後五時まで閉鎖されていた。

研一は指定券の窓口前に並びながら、何気なく窓口の背後にある料金表のボードに目をやった。当日券よりも日時指定券の料金が高くなっている。通常は、前売りチケットの方が当日券よりも安い料金設定になっている。それとは逆だ。どうしてだろう。研一はチケットをエレベーターの搭乗券と交換する際に、窓口担当の人に料金の違いについて尋ねたところ、当日券と違って指定券の方が待ち時間なしで乗れるので料金が高くなっているという説明であった。

「時間が節約になる分、料金が割高になるということか。まさに『時は金なりか』』と、言って研一は頷いた。

「今、お父さんが言った『時は金なり』ってどういう意味」すかさず弥生が研一に尋ねた。

「時間はお金のように貴重で有効なものだから、無駄にしてはダメだよ、って意味だよ。僕たちは前もってチケットを買っていたから、指定された時刻になれば待たずに展望デッキ行きのエレベーターに乗れるけれど、チケットを持っていない人は並ばないと買えないし、買うまでに時間がかかるってことだよ。それに今日は強風のため五時までチケット売場が閉まっているのでその間は買えないんだ」研一が答えた。

「要するに、早く展望デッキに行ける分、料金が高いつてことね」

弥生は研一の説明に合点した。

「大まかに言えばそうだね」研一が言った。

研一たちはチケットと交換した「シャトル搭乗券」を持って搭乗時刻を待った。間もなく指定された時刻となり展望デッキ行きのエレベーター（シャトル）に乗り込んだ。エレベーターの扉が静かに閉まり上昇し始めた。全く揺れを感じることなくわずか一分足らずの間で地上から三五〇メートルにある展望デッキに到着した。展望デッキは三階構造になっていて上りのエレベーターは最上階に着く。地上から六三四メートルの高さを持ったスカイツリーは世界一高い自立式電波塔としてギネスブックに登載されている。展望デッキからは三六〇度のパノラマが展開し、眼下に広がる東京の街並みが一望できる。

「お父さん、こっちの方向に富士山が見えるはずだけど今日は見えないわ」弥生が言った。

「そうだね。晴れていれば見えるはずなんだが、残念ながら、富士山は望めないね」

研一は答えた。

「ほら、お父さん。あそこに赤と白のツートンカラーの鉄塔が見えるわ。もしかして東京タワーじゃないの」弥生が言った。

「よく分かったね。あの鉄塔は東京タワーだよ」研一が答えた。

東京タワーはスカイツリーができるまでの半世紀以上、国内の電波塔では首位の座を守ってきた。三三三メートルの東京タワーはエッフェル塔を超える高さで設計されたという。

研一は中学校の修学旅行で初めて東京に来た時に東京タワーに上ったことを思い出した。地上から一五〇メートルの大展望台から見えた、宝石箱のような東京の夜景が今でも忘れられない。

展望回廊には記念写真の撮影コーナーが設置されていた。来年の年賀状にしようと、早速、三人の写真を撮ることにした。

「準備はいいですか。それでは撮ります。カメラに向かってスカイツリーって言うてください。はい、スカイツリー！」係りの人が大判のカメラを研一たちに向けて言った。

カツシヤ

フラッシュの光と同時にシャッターを切る音がした。

しばらくして六つ切りサイズの写真が出来上がった。この写真をスキヤナーで取り込んで年賀状の画像に加工することにした。家族の写真入り年賀状の作成は研一の仕事になっている。研一たちは展望デッキの三階から二階、一階へと降りて下りのエレベータに乗った。地上にある商業施設「東京ソラマチ」でお土産を買った後、スカイツリーを後にした。

研一たちは地下鉄とJRを乗り継いで社宅のある北区に向かった。初めて来た東京でも人も通りの多い街の中を歩き回って疲れが出たのだろうか、弥生は帰りの電車の中で居眠りを始めた。車を使ったドアツードアの移動が当たり前の地方と比べて公共交通機関を使った移動が主流の都会では、最寄り駅やバス停まで歩かなくてはならない。体力のない幼い子どもやお年寄りにはちょっと辛いかもしれない。

三人はJR埼京線の十条駅で降りた。研一の社宅は駅から降りて十分程の所にある。社宅に帰る途中には商店街がある。研一はこの商店街で買物をした後、赤提灯で立ち飲みをして社宅に帰るパターンが多い。今日はこの商店街で夕食の食材を買って帰ることにした。今晚の夕食担当は由紀子だ。

「お母さん、献立は決まった？」弥生が由紀子に尋ねた。

「そうね。今日のような蒸し暑い日はスパイシーなエスニック料理なんかどうかしら。食欲が落ちるこの時期にはびつたりの料理だわ」

「お母さん。スパイシーなエスニック料理って、どんな料理」

「香辛料が効いたさっぱりとした味の外国料理のことよ」

「外国料理って、もしかしてイタリア料理のこと」

「正解。どうして分かったの」

「お母さんがイタリアに語学留学した頃に料理の勉強をしたことを聞いていたから、そうじゃないかと思ったの」

「ミネストレーネといわしのマリネなんかどうかしら」

「ミネストレーネって、トマトを使った野菜スープのことでしょう」

「そうよ。トマトの他にタマネギ、ジャガイモ、ニンジン、キャベツ、セロリ、ズッキーニ、さやいんげんなど、季節の野菜とベーコンを煮込んで作る料理よ。ご飯も兼ねてお米

も入れてみるわ」

「わーい。楽しみだわ」トマト料理が大好きな弥生は大喜びだ。

「それとワインもね。イタリア料理にはワインが合うね。ワインの品揃えが豊富なお店がこの近くにあるので案内するよ」研一が提案した。

スーパーで食材を買い揃え、酒屋で由紀子のお気に入りのワインを買った後、商店街を歩いていると、行列ができているお店があった。

「あそこのお惣菜屋さんはメンチカツやコロッケが美味しくて評判の店だよ」研一は数軒先にある店を指して言った。三人は惣菜屋の店先に着いた。

「弥生、味見（試食のこと）してみる」由紀子が弥生に声をかけた。

「うん」弥生が答えた。

研一も由紀子の視線を気にしながら試食用のメンチカツを口に入れた。

「評判の店だけあって美味しいわ。スーパーのお惣菜と違って商店街のお店で売っているお惣菜には添加物が入っていないし、味もそんなに濃くないの。あの、このメンチカツを三個ください」由紀子が店員に注文した。

東京で単身赴任を始めて気づいたことだが、都会の商店街は地方の商店街と比べて活気がある。夕方近くになると大勢の買い物客で商店街は賑わう。研一は買い物客で賑わう商店街の様子を見ては少年時代を思い出す。小学生の頃、祖父と自転車で乗って隣の商店街に買い物に出掛けることがあった。大勢の買い物客で賑わった当時の商店街の面影は、今はもうなくなった。地方の商店街は、今やシャッター通り化して人通りもまばらで寂れている。一方、郊外には広い駐車場を備えた大型商業施設が進出し、その施設めがけて買い物客が集中している。電車、地下鉄、バスなどの公共交通機関が充足している都会と比べて人口の少ない地方では住民の足代わりになっているのが自家用車だ。通勤や買い物など、地方で暮らすには車がないと何かと不便だ。一家に数台の車を持っている家もある。研一の家にも車が二台ある。研一が通勤や家族で出かける時に使う車と由紀子が買い物などに使う車だ。

社宅に帰ると由紀子は台所に立って夕食の支度を始めた。程なくミネストレーネといわしのマリネが出来上がった。それとお惣菜のメンチカツを加えて夕食の支度ができた。研一はワインのボトルを開けて、自分と由紀子のグラスに注いだ。弥生のグラスにはオレンジジュースを注いだ。

「今日はお疲れ様でした。それでは、乾杯！」

「あなた、白いご飯の時は食事の最後に食べるけど、このミネストレーネに入っているお米はスープと一緒に食べていいのよ」由紀子が研一に言った。

研一が家で食べる白いご飯は汁ものと一緒に最後に食べる決まりになっている。体内で糖分に分解される炭水化物を最初に食べると、血糖値が上昇するので、先に野菜や肉などのタンパク質を食べて、最後にご飯を食べることにしている。由紀子の監視下にある我が家ではこのルールは厳守されているが、研一が社宅で自炊する時はこのルールは無視されている。淡泊な味のご飯だけを最後に口に入れても美味しくないからだ。社宅で食事をする時は、どんぶりに熱々の白いご飯を少なめに盛って、ご飯の上におかずをたっぷり載せて食べている。こうすれば洗い物の食器も少なくて済む。もちろん由紀子には内緒にしている。

「今日は疲れたから早く寝よう」

研一は由紀子と弥生に声をかけた後、居間に川の字に布団を敷いて就寝した。

由紀子と弥生が東京に来て二日目。三人は研一の社宅で朝を迎えた。今日は一日かけて東京デイズニールランドに出掛ける。昨夜は熱帯夜だったが、今朝も夏の強い日差しが朝食を食べている部屋に容赦なく入り込んでいる。

「お父さん。どうして東京の夜ってこんなに暑い。暑くってよく眠れなかったわ」

弥生が研一に尋ねた。

「ヒート・アイランドって言うんだけど。東京のように建物や地面がコンクリートで覆われた地域では、木造の建物や地面が多い地域よりも温度が高くなってしまふんだ。日中の強い日差しでコンクリートにたまった太陽の熱が街の中に残っているし、エアコンの室外機から外に出ていく人工の熱も加わって、街全体が暑くなってしまうんだ。特に風が弱い晴れた夜は、ヒートアイランドになりやすいんだ」研一が答えた。

「でもお家では夜になっても、こんなに暑くはないわ。さっきお父さんが言ったように、木の家や地面が多いからなの」弥生が尋ねた。

「その他にも、我が家の周りには温度を下げてくれる自然があるよ。水が張られた田んぼがあるし、家の近くを流れる大きな川があるだろう。田んぼや川の水が蒸発して気体になる時に周りから熱が奪われるため、周囲の温度が下がってしまうんだ。夜に窓を開けておくと、外から涼しい空気が部屋に入ってくるだろう。東京でも、夜になると東京湾から涼しい海風が吹いてくるけれど、東京湾を囲むように建っている高い建物に遮られ、涼しい

風が街の中まで入って来ないんだ」研一は答えた。

「昨日もそうだったけれど、今日も真夏日になりそうだわ。熱中症にならないように帽子をかぶって出掛けましょう。それと日焼け止めも必要だわ。弥生、日焼け止めクリームをたっぷり塗って出かけないと、肌が焼けてヒリヒリになってしまうわよ」由紀子が弥生に言った。

暑さ対策を済ませた三人は電車に乗って東京駅で京葉線に乗り換えた。東京ディズニーランドのある舞浜駅で降りると、ディズニーランドの入場口に向かって大きな人の流れができていた。チケット売り場では当日券を求めて大勢の人が長蛇の列を作って並んでいた。研一たちはインターネットで購入した日付指定券を持っていたので、直接、入場ゲートに向かった。幾つもある入場ゲートも大混雑していた。研一たちのように夏休みを利用して地方から来園したと思われる家族連れも多い。

東京ディズニーランドは千葉県浦安市舞浜に建設され、一九八三年の四月に開園した国内最大のテーマパークだ。アメリカ国外では初めてとなるディズニーのテーマパークとして、開園当初から国内外の注目を集めた。開園した八十三年には来園者が五百万人を超え、二年目には一千万人を超えた。当時、都内の大学に在籍していた研一も在学中に、何度か友人と訪れたことがあった。また由紀子と結婚してからも二回来園している。

入場ゲートを抜けると、そこは日常の生活空間とは全く違うファンタジックな空間が広がっていた。

「あ、ミッキーマウスだ。あそこにミニーマウスがいる。向こうにドナルドダッグもいるよ」初めてディズニーランドに来た弥生は、来園者に愛嬌よく振る舞っている人気キャラクターを見て興奮気味に言った。

「弥生、ミッキーと並んで立ってごらん。写真を撮ってあげるよ」研一が弥生に言った。

「はい、チーズ」研一はスマホのレンズを二人に向けてシャッターを押した。
カシヤ

「そうだ。年賀状の写真も撮ろうか」

研一は近くにいたスタッフの人にスマホを預けてシャッター押しを依頼した。家族三人の両脇にミッキーとミニーが立った構図の写真を撮た。

「はい、いいですか。チーズ」スタッフの人がスマホを向けて言った。

カシヤ

「このミッキーと一緒に撮った写真を学校に持って行って友達に自慢しちゃおうかな。」スマホに記録された画像を見ながら弥生は言った。

研一たちは下調べをして、行きたいアトラクションをあらかじめ決めていたので、ガイドマップを見ながら、目的のアトラクション会場に向かった。人気のアトラクションなのだろうが、入り口前には長い列ができていた。最後列のボードを持って立っていたスタッフの人に待ち時間を聞いたら、一時間ほどになるという返事だった。炎天下での一時間待ちには辛い。ここは諦めて次のアトラクション会場に向かったが、こちらも長い列ができていたので、並ぶのをやめた。三か所目のアトラクション会場も同じように長蛇の列ができていた。行きたいと思っただけ決めておいたアトラクションは後回しにして、空いているアトラクションから見回ることにした。乗り物に乗って異次元の世界を体験したり、アドベンチャーが楽しめるようなアトラクションはどれも人気が高いらしく、入口前には長い行列ができていて、一方、見て楽しむようなアトラクションやキャラクターグッズを売っているショップは比較的空いている。日差しの強い時間帯は、並ばずに入れるアトラクションを優先することにした。

夕方近くになって日差しが弱くなったので、どうしても行きたいアトラクションに絞って並ぶことにした。最初に来た時よりは行列が短くなっている。気温も下がってきたので、並んでも待つていてもそれほど辛くはない。しかし午後に入ると、今度は近郊に住む人たちが、日差しが弱くなって気温が下がる時間帯を狙って入園してくるので、そのことも考えて行動しないといけない。研一たちの持っている当日券は午後十時まで使えるチケットであるが、立ちっぱなし、歩きっぱなしの三人は、もはやこれまでと、退場ゲートを潜って舞浜駅に向かった。駅前のレストランで遅めの夕食を食べた後、三人はへとへとになって帰路についた。

由紀子と弥生が東京に来て三日目の朝。窓のカーテンを通過した朝日が研一たちの寝ている部屋を明るくした。

「あら、いやだわ。もうこんな時間。みんな起きて」

布団から起き上がった由紀子が部屋の時計を見て、研一と弥生に言った。

「おはよう。いやー、よく眠れた」由紀子の声で起き上がった研一が両腕を伸ばして言った。

「ええー、私はまだ寝足りないわ」弥生が眠たそうな顔をして言った

「弥生。今、何時だと思っているの。もう八時過ぎよ」

昨日は午後九時半に社宅に帰り、就寝したのが十一時頃だった。ドイツニーランドで終日、立ちっぱなしで過ごした疲れが出たのか、三人は朝寝坊した。昨晚も熱帯夜であったが、昼間の疲れがたまっていたせいも、寝苦しさを忘れるほどに熟睡できた。

今日は日曜日。由紀子と弥生が新潟に帰る日だ。午前中、東京駅周辺で観光や買い物をした後、午後の新幹線で帰る予定になっている。朝食をとった後、研一たちは電車に乗って東京駅に向かった。駅のコインロッカーに由紀子と弥生の旅行鞆を預けた後、丸の内口から出た三人は皇居に向かった。普段は車が往来する日比谷通りだが、今日は歩行者天国になっている。広い道路でサイクリングを楽しむ若者やジョギングをする人たちの姿が見えた。

研一たちは日比谷通りを横断して皇居前広場に入った。皇居前広場の一番の人気はなんといっても「二重橋」だ。ツアーガイドの女の人が手旗を持って観光客の団を二重橋の方角に案内していた。研一たちも観光客の後に続いた。

皇居前広場を歩きながら弥生が、「お父さん。皇居って天皇陛下が住んでいるお家でしょう。屋敷が広すぎてどこにお家があるのか分からないわ。」と、研一に尋ねた。

「皇居は東京ドームの約二十五倍もの面積があるんだ。江戸時代に徳川幕府のお城、江戸城っていうんだけど、その江戸城があった場所が明治時代になって皇居になったんだ。

天皇、皇后両陛下が普段、住んでいるお家のことを『御所』と言うんだけど、ここからは見えないよ」研一は答えた。

「こんなに広いお屋敷にたった二人だけで住んでいるの」弥生が興味深そうに研一に尋ねた。

「広い皇居の中には、御所のほか宮中での行事や儀式に使われる宮殿、宮内庁や宮内庁病院、皇宮警察本部といった役所の建物もあるよ。これらの建物で勤務している人も沢山のんだ」研一が答えた。

「えー、そうなんだ。皇居って大勢の人たちが住んでいるのね」弥生は納得した様子で頷いた。

二重橋の前では大勢の観光客が写真を撮っていた。

「すみません。シャッターを押してもらいたいですよ」

研一は写真撮影を終えた三人グループの若者に声を掛けたら、「いいですよ」と、言って一人の若者が応じてくれた。

「準備はいいですか。撮りますよ」

カシヤ

「もう一枚お願いします」

カシヤ

「ありがとうございました」研一は写真を撮ってくれた若者にお礼を述べた。

東京駅に戻った研一たちは、丸の内駅舎をバックに写真を撮ることにした。丁度、研一たちが立っている場所で、駅舎に向けて写真を撮っていた年配の男性がいたので、研一はこの男性にスマホのシャッター押しを頼んだ。

カシヤ

また一枚、年賀状の写真ができた。

丸の内駅舎は東京駅が誕生してまもなく百年を迎えることから保存復元工事が行われ、二〇一二年十月に創建当時の駅舎が復元した。しかし駅舎の背後には創建当時にはなかった高層ビルが八重洲口方向に林立している。また駅舎はライトアップされ、首都東京の玄関口として風格ある夜間景観を形成している。

研一と弥生は由紀子の買物に付き合うため、丸の内ビルディングに入った。通称「丸ビル」はオフィスビルであるが商業施設としてのフロアーもあるので、休日になると大勢の買い物客で賑わっている。丸ビル内のウィンドーショッピングを楽しんだ後、今度は道路を挟んで向かい側に建っている「新丸ビル」に移動して、館内のショップを見て回った。

三人は東京駅の丸の内口から連絡通路を通って反対側の八重洲口にあるデパートに向かった。お土産などの買い物をした後、デパートにあるレストラン街で昼食をとることにしたが、どの店の前にも長い行列ができてきている。三人は比較的空いている中華料理店に入って遅めの昼食をとった。八重洲口から駅の構内に入って、コインロッカーから二人の鞆を取り出して、お土産を詰め込んだら、鞆はパンパンに膨らんだ。上越新幹線の発着ホームで待っていると帰りの新幹線がホームに入ってきた。ドアが開いて由紀子と弥生が乗り込んだ。

ピロロロロ

発車のベルが鳴った。ドアが閉まって新幹線がゆっくりと動き出した。窓越しから弥生が研一に向かって手を振った。研一も手を振って応えた。

研一は由紀子や弥生と過ごした週末の三日間を振り返り、東京の不思議な魅力を発見した。オフィス街に建つ近代的な高層ビル群と、ビルの谷間に低層とはいえ存在感を誇示す

る歴史的建造物とが織り成す奇妙な調和、平日と週末とで交代するオフィス街の主役たちなど…。

来週からはお盆の休暇も加わって五日間の長期休暇に入る。帰省すれば研一の誕生日のお祝いと弥生の夏休みの自由研究の手伝いが待っている。

(よし、明日からまた仕事に頑張るぞ)

研一は自分にそう言い聞かせて、由紀子と弥生を乗せた新幹線が視界から消えるまでホームにたたずんでいた。(了)